百人一首

大岡信

大岡信〈著者〉1931年静岡県三島生れ。東京大学卒業。明治大学教授。詩人。詩集『記憶と現在』『大岡信詩集』『春　少女に』等のほか、『紀貫之』『詩への架橋』『うたげと孤心』『片雲の風』『アメリカ草枕』『折々のうた』『大岡信著作集』など著書多数。

講談社文庫

百人一首
大岡 信

昭和55年11月15日第1刷発行
昭和56年2月10日第2刷発行

発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽2-12-21
電話　東京（03)945-1111(大代表)
振替　東京 8-3930
デザイン　亀倉雄策
製　版　株式会社まゆら美研
印　刷　東洋印刷株式会社
製　本　株式会社千曲堂

© Makoto Ooka 1980

Printed in Japan

0192-316521-2253（0）　定価 380円
（落丁本・乱丁本はおとりかえします）

談社文庫

百人一首

大岡信

講談社

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

はじめに
――『百人一首』とその「訳」について

『百人一首』は江戸時代以来久しきにわたって、日本の正月をいろどる風雅なカルタ遊びの主役であった。百首の名歌アンソロジー――そうあらたまって呼んでみると、そのアンソロジーを遊戯に用いて暮してきた日本の家庭生活というものも、これでなかなか趣きに富んだものだった。もっとも近年はそういう風習もすたれてしまい、娘たちの振袖のたもともいたずらに大路小路の風を切るばかり、それがカルタの札の上をかすって舞う情趣も大方は失われた。

『百人一首』は今では読物として愛読されるものとなった。そうなってみると、昔、「こぬひとを―　まつほのうらの―　ゆうなぎにい―」と節をつけて読みあげていたときには大して考えてみることもなかった一首一首の歌の意味が、案外に、というよりはじつにしばしば、なかなか複雑なものだったことに気づく。歌加留多（うたがるた）遊びはしょせん競技である。競技に没頭している人に、「焼くや藻塩の身」がなぜ「こがれ」ねばならないか問うてみても仕方がない。第一、競技に上

達すればするほど、歌は最初の一音、二音の勝負となって、一首をのどかに味わう心境とは関係がなかった。

『百人一首』を一首一首の歌として読んでゆくと、そこには上古以来の和歌の歴史を通じて蓄積されてきた言葉の富というものがしみこんで、おのずと響き、歌っているのが感じられる。

『百人一首』を撰定したのは藤原定家とされている。その定家は、必ずしも古今の歌人の百人ひとりひとりについて、その極め付きの秀歌、代表作と彼が見るものを慎重に選びだしたとは思えない。にもかかわらず、人々に愛誦され、たえず繰返し口ずさまれているうちに、百首の歌はそれぞれにある種の愛すべき雰囲気、上品な貫禄をそなえるにいたった。はじめて接する時にはわずらわしいと思われる言葉の複雑な技巧も、聞きなれた耳にはさほど突飛なものでなくなり、かわりに語の一音一音の並び具合のふくよかさにまで思いがゆくようになる。それが結果として、とびきりの秀作ぞろいとはいえないだろうこの百首の詞花集全体に、理非を超えた魅力をそなえさせるにいたり、古来和歌というものが発揮してきたふしぎな牽引力にまで、あらためて思いを馳せさせることにもなる。

『百人一首』の註釈書・解説書は数えきれないほど書かれている。私のこの本は、それら先行する厖大（ぼうだい）な著述によって積みあげられてきた知識見解に極めて多くのものを負うていることは言うまでもない。私がさらに新たに一書を加えることは、屋上に屋を架するにすぎないことかもしれない。ただ私は、この本でささやかな試みをしてみた。すなわち、通常の注釈書では「通釈」とよばれている部分に、行分けの形にした一種の現代詩訳を置いたことである。

これは必ずしも原歌の厳密な通釈ではない。場合によっては、歌の中の掛詞（かけことば）や縁語（えんご）などの説明

であるべき要素までも、「訳」の中に取りこんでいるから、原歌と読みくらべてみると、印象が大いに異るものになっているようなものもあろう。「一種の現代詩訳」と言ったが、別の言い方をすれば、百人一首の和歌を「楽譜」とした、現代語による「演奏」だと言ってもいいだろうか。その成否は読者の判断にゆだねるほかないが、私があえてこういう無謀に近い試みをした理由については、なお一言つけ加えておきたい。

私は中学生の昔から、国文解釈の勉強をする折などにいつも疑問に思う一つのことがあった。それは和歌や俳諧をはじめ、詩的な表現がテキストになっている時、それの通釈が、一つ一つの語義の解釈に慎重なあまり、通読すると必ずしもすんなりと一息に了解できるようなものになっていない例が少なくないという事実である。文法上の正解が、一篇の詩歌の通釈としては必ずしも魅力満点のものとは限らぬ事例が多いのではないか。この疑問は、少年の日から今日にいたるまで、私の中でいつもわだかまっている疑問である。たとえば、感嘆詞風の言いまわしに対して、判(はん)で押したように、「……であることよ」とやってすませばそれでいいのだろうか、といった疑問。

私のこの一種の現代詩訳なるものは、そういう疑問に対する私のささやかな答であると考えていただきたい。そこには原歌にない余計な言葉や解釈も含まれているだろう。文法的に見れば甚だしく越権的な訳もあるかもしれない。ただ、散文による「通釈」に代えて、こういう試みもあってもいいのではないか、という私の意図も、少しは実現されているかもしれない。それは私一個の希望にすぎないが、幸いにして読者の目にもそう映ってくれるなら、これを試みた甲斐もあったことになる。

そういう試みをする一方、歌の語義などの説明については、別途に書きしるすことはもちろんである。また、一人一人の歌人にかかわるエピソードのたぐいについても、適当と思われる範囲内でつけ加えている。そういうエピソードを見てゆくと、おのずと、これらの和歌の世界を大きく包んでいる各時代の文化全体の姿というものが、『百人一首』という一つの窓を通してちらちら見えてくるところがあり、興味をそそられるからである。

目次

はじめに――『百人一首』とその「訳」について　三
一　秋の田のかりほの庵の苫をあらみわが衣手は露にぬれつつ　一七
二　春すぎて夏来にけらし白妙の衣ほすてふ天の香具山　二〇
三　あしひきの山鳥の尾のしだり尾のながながし夜をひとりかも寝む　二四
四　田子の浦にうち出でて見れば白妙の富士の高嶺に雪は降りつつ　二六
五　奥山に紅葉踏みわけ鳴く鹿の声きくときぞ秋はかなしき　二八
六　鵲の渡せる橋におく霜のしろきを見れば夜ぞ更けにける　三〇
七　天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも　三三

八　わが庵は都のたつみしかぞ住む世をうぢ山とひとはいふなり　三五
九　花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに　三七
十　これやこの行くも帰るも別れてはしるもしらぬもあふ坂の関　四一
十一　わたの原八十島かけてこぎ出でぬと人には告げよ海人のつり舟　四四
十二　天つ風雲のかよひ路吹きとぢよをとめの姿しばしとどめむ　四六
十三　筑波嶺のみねより落つるみなの川こひぞつもりて淵となりぬる　四八
十四　みちのくのしのぶもぢずりたれ故に乱れそめにしわれならなくに　五〇
十五　君がため春の野に出でて若菜つむわが衣手に雪は降りつつ　五三
十六　たち別れいなばの山の峰に生ふるまつとしきかば今帰り来む　五五
十七　ちはやぶる神代もきかず龍田川からくれなゐに水くくるとは　五八
十八　住の江の岸に寄る波よるさへや夢の通路人目よくらむ　六二
十九　難波潟みじかき蘆の節の間もあはでこの世をすぐしてよとや　六四
二十　わびぬれば今はたおなじ難波なるみをつくしても逢はむとぞ思ふ　六七
二十一　今来むといひしばかりに長月の有明の月を待ち出でつるかな　六九
二十二　吹くからに秋の草木のしをるればむべ山風をあらしといふらむ　七二

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

二十三　月見ればちぢにものこそ悲しけれわが身一つの秋にはあらねど　七四
二十四　このたびは幣もとりあへず手向山紅葉の錦神のまにまに　七七
二十五　名にし負はば逢坂山のさねかづら人に知られでくるよしもがな　八一
二十六　小倉山峰のもみぢ葉こころあらば今ひとたびのみゆき待たなむ　八四
二十七　みかの原わきて流るるいづみ川いつみきとてか恋しかるらむ　八七
二十八　山里は冬ぞさびしさまさりける人目も草もかれぬと思へば　九〇
二十九　心あてに折らばや折らむ初霜のおきまどはせる白菊の花　九二
三十　有明のつれなく見えし別れより暁ばかり憂きものはなし　九六
三十一　朝ぼらけ有明の月と見るまでに吉野の里にふれる白雪　九九
三十二　山川に風のかけたるしがらみは流れもあへぬ紅葉なりけり　一〇二
三十三　久方の光のどけき春の日にしづこころなく花の散るらむ　一〇四
三十四　たれをかも知る人にせむ高砂の松も昔の友ならなくに　一〇七
三十五　人はいさ心も知らずふるさとは花ぞ昔の香ににほひける　一〇九
三十六　夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづこに月宿るらむ　一一三
三十七　しらつゆに風の吹きしく秋の野はつらぬきとめぬ玉ぞ散りける　一一五

三十八　忘らるる身をば思はずちかひてし人の命のをしくもあるかな　一一八
三十九　浅茅生の小野の篠原しのぶれどあまりてなどか人の恋しき　一二一
四十　しのぶれど色に出でにけりわが恋はものや思ふと人の問ふまで　一二三
四十一　恋すてふわが名はまだき立ちにけり人知れずこそ思ひそめしか　一二五
四十二　契りきなかたみに袖をしぼりつつ末の松山浪越さじとは　一二七
四十三　あひみての後のこころにくらぶれば昔は物を思はざりけり　一三〇
四十四　逢ふことのたえてしなくはなかなかに人をも身をもうらみざらまし　一三二
四十五　あはれともいふべき人は思ほえで身のいたづらになりぬべきかな　一三四
四十六　由良の門を渡る舟人かぢを絶え行方も知らぬ恋のみちかな　一三七
四十七　八重葎しげれる宿のさびしきに人こそ見えね秋は来にけり　一三九
四十八　風をいたみ岩うつ波のおのれのみくだけてものを思ふころかな　一四一
四十九　みかきもり衛士のたく火の夜はもえ昼は消えつつものをこそ思へ　一四四
五十　君がため惜しからざりし命さへ長くもがなと思ひけるかな　一四七
五十一　かくとだにえやはいぶきのさしも草さしも知らじな燃ゆる思ひを　一五〇
五十二　明けぬれば暮るるものとは知りながらなほうらめしき朝ぼらけかな　一五四

五十三　なげきつつひとり寝る夜の明くるまはいかに久しきものとかは知る　一五六
五十四　わすれじの行末まではかたければ今日をかぎりの命ともがな　一六〇
五十五　滝の音はたえて久しくなりぬれど名こそ流れてなほ聞えけれ　一六三
五十六　あらざらむこの世のほかの思ひ出にいまひとたびのあふこともがな　一六六
五十七　めぐりあひて見しやそれとも分かぬまに雲がくれにし夜半の月影　一七一
五十八　有馬山猪名のささ原風吹けばいでそよ人を忘れやはする　一七四
五十九　やすらはで寝なましものをさ夜更けてかたぶくまでの月を見しかな　一七七
六十　大江山いく野の道の遠ければまだふみも見ず天の橋立　一八〇
六十一　いにしへの奈良の都の八重桜けふ九重ににほひぬるかな　一八三
六十二　夜をこめて鳥の空音ははかるともよに逢坂の関はゆるさじ　一八五
六十三　今はただ思ひ絶えなむとばかりを人づてならでいふよしもがな　一八九
六十四　朝ぼらけ宇治の川霧たえだえにあらはれわたる瀬々の網代木　一九二
六十五　恨みわびほさぬ袖だにあるものを恋にくちなむ名こそ惜しけれ　一九五
六十六　もろともにあはれと思へ山桜花よりほかに知る人もなし　一九七
六十七　春の夜の夢ばかりなる手枕にかひなく立たむ名こそ惜しけれ　一九九

六十八　心にもあらでうき世にながらへば恋しかるべき夜半の月かな　二〇三
六十九　嵐吹く三室の山のもみぢ葉は龍田の川の錦なりけり　二〇五
七十　さびしさに宿を立ち出でてながむればいづくも同じ秋の夕暮　二〇八
七十一　夕されば門田の稲葉おとづれて蘆のまろ屋に秋風ぞ吹く　二一〇
七十二　音に聞く高師の浜のあだ波はかけじや袖の濡れもこそすれ　二一二
七十三　高砂の尾上の桜咲きにけり外山の霞立たずもあらなむ　二一四
七十四　憂かりける人をはつせの山おろしはげしかれとは祈らぬものを　二一六
七十五　契りおきしさせもが露を命にてあはれ今年の秋もいぬめり　二一八
七十六　わたの原漕ぎ出でて見ればひさかたの雲居にまがふ沖つ白波　二二〇
七十七　瀬をはやみ岩にせかるる滝川のわれても末に逢はむとぞ思ふ　二二二
七十八　淡路島かよふ千鳥のなく声に幾夜寝ざめぬ須磨の関守　二二五
七十九　秋風にたなびく雲の絶えまよりもれ出づる月の影のさやけさ　二二七
八十　長からむ心も知らず黒髪のみだれて今朝はものをこそ思へ　二二九
八十一　ほととぎす鳴きつる方をながむればただ有明の月ぞ残れる　二三一
八十二　思ひわびさても命はあるものを憂きにたへぬは涙なりけり　二三三

八十三　世の中よ道こそなけれ思ひ入る山の奥にも鹿ぞ鳴くなる　二三五
八十四　ながらへばまたこのごろやしのばれむ憂しと見し世ぞいまは恋しき　二三八
八十五　夜もすがらもの思ふころは明けやらで閨のひまさへつれなかりけり　二四〇
八十六　なげけとて月やはものを思はするかこちがほなるわが涙かな　二四二
八十七　村雨の露もまだひぬまきの葉に霧立ちのぼる秋の夕暮　二四五
八十八　難波江の蘆のかりねのひとよゆゑみをつくしてや恋ひわたるべき　二四七
八十九　玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば忍ぶることの弱りもぞする　二四九
九十　見せばやな雄島のあまの袖だにも濡れにぞ濡れし色はかはらず　二五三
九十一　きりぎりす鳴くや霜夜のさ筵に衣片敷きひとりかも寝む　二五五
九十二　わが袖は潮干に見えぬ沖の石の人こそ知らね乾くまもなし　二五八
九十三　世の中は常にもがもな渚こぐあまの小舟の綱手かなしも　二六〇
九十四　み吉野の山の秋風さ夜ふけてふるさと寒く衣うつなり　二六三
九十五　おほけなく憂き世の民におほふかなわが立つ杣にすみぞめの袖　二六五
九十六　花さそふ嵐の庭の雪ならでふりゆくものはわが身なりけり　二六八
九十七　来ぬ人をまつほの浦の夕なぎに焼くや藻塩の身もこがれつつ　二七一

九十八　風そよぐならの小川の夕暮はみそぎぞ夏のしるしなりける　二七五
九十九　人もをし人もうらめしあぢきなく世を思ふゆゑに物思ふ身は　二七七
百　ももしきや古き軒端のしのぶにもなほあまりある昔なりけり　二八一

『小倉百人一首』を読む人のために　二八四
索引……百首索引・全句索引・歌人名索引　巻末
『小倉百人一首』関係地図

百人一首

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com